

連載

試論・民族総福音化への道 (10)

# 先ず早天祈祷から

⑩



副総裁兼事務局長 手束 正昭 (高砂教会牧師)

な方法なのである。

二つ目は二五二節にある。「わたしは早くからあなたのかかしによつて、あなたがこれをとこしえに立てられたことを知りました」。しかし、この御言葉はその意味を汲み取ることは難しい。ところで、リビングバイブルは次のように訳している。「神様は決してお変わりにならないということを、わたしは小さい頃から知っています」。すると、二四九節にある「神のいつくしみ」や「神の公義」は決して変わることもなく、必ずや今襲いかかってくる大きな試練も解決されるといふ確信の表明となる。然り、早天祈祷の祝福の二つ目は、死ぬか生きるかという大きな悩みであつても、必ずや解決に至ることになることなのである。そしてこのことについては、この連載の中でも幾つかの証しをさせて頂いた。

かくて、この詩篇の記者もまた、早天祈祷を通して、早天祈祷のもたらす驚くべき祝福を、詩の形を通して、私達に教え訴えているのである。そして、アンドリュー・マーレーもまた、早天祈祷の祝福を、次のように厳かな調子で語っている。「キリストを救い主として受け入れ、さらに聖霊のパプテスマを求めることの次に、朝の祈りを守り、一日の三十分を神と共に過すという挫けることのない決意を作り上げることに以上、大きな益をもたらす行為は、私にも他人にもないのである」。

前回、前々回で、私が体験した早天祈祷の祝福についての証を書いてきたが、こでもう一度、御言葉に立ち戻り、詩篇二九篇(四五)二五二節から、早天祈祷の重大な意義について探りたい。

二五〇節を見ると、この詩篇の記者は理由は定かでないが、激しい攻撃、迫害に遭遇していることが分かる。「わたしをしえたげる者が悪いたくらみをもつて近づいています。彼らはあなたのあきてを遠くはなれているのです」と。

しかも、その前の二四九節には「主よあなたの公義にしたがつて、わたしを生かしてください」(共同訳では「主よ、慈しみ深くわたしのいのちを下させてください」と)と祈っていることからして、死ぬか生きるか、立つか倒れるかという極めて深刻な事態の中に置かれていることが分かる。

このような危機的状态に置かれると、人間にはどのような生理的現象が起こるであろうか。先ず、物が食べられな

くなるということがあり、次に、眠れなくなるということ。そして三番目には、早朝に目が覚めてしまうということである。クリスチャンにとつては、このような生理現象は、神の促しとして受けとめるべきである。即ち、物が食べられなくなるということは、「断食をして祈れ」ということであり、眠れなくなるということは、「徹夜をして祈れ」ということであり、早朝に目が覚めるということは、「早く起きて祈れ」ということである。恐らく、この詩篇の記者も苦悩のうちに、早朝に目が覚めてしまったようで、「わが目は夜警の交代する時に先だてでさめ」(二四八節)と告白している。そこで、二四七節(「わたしは朝早く起き出て呼ばわれます」)にあるように、早天祈祷を捧げるようになった。

その結果、何が起こつたであろうか。二つある。一つは、二五二節に暗示されている。「しかし主よ、あなたは近くいらせ

られます」。即ち、早天祈祷は主の臨在をもたらすということである。ここに、何にもまして早天祈祷の素晴らしさがある。一日の最初の時を主の臨在の下に過ごす時、その日中が主の恵みの下に置かれるのである。それ故に、早天祈祷を毎日行うことは、ある時ある場所を受けたあの大きな恵みを持つ続けるために不可欠である。私達は、例えば修養会などで、圧倒的な聖霊の満たしを体験し、天にもものぼる気持ちにさせられることがある。しかし、それ程の大きな恵みの体験をしても、二週間が過ぎ二週間が過ぎると、その恵みはいつの間にか消失していつてしまい、「元の木阿弥」の状態に戻ってしまう。その繰り返しである。このような「積木くずし」をやめて、あの恵みを日常性においても継続させていくための最も良い方法が早天祈祷を続けることである。早天祈祷こそが、戴いた主の恵みを長く保持していく上で、最も有効